

## 宮内会長からのお話



活動団体のみなさま、それから会場のみなさま、ありがとうございました。とても勉強になりました。

6つの団体に報告して頂きましたが、この交付金を受けたのは全部で52団体あります。様々な団体が北海道で森づくり活動をされています。今回の報告いただいたどの団体も、1つとして同じ活動がありませんでした。多様な活動が行われている事が、とても意味のあることじゃないかと思っております。私の偏見かもしれませんが、発表者の半分が女性だったという事に驚き、すごく北海道の森づくりが面白くなってきているなと思いました。なぜか馬の報告も3件あり、これもとても面白い傾向です。

私は専門が環境社会学なので、いろいろな所で人と自然の関係などを調べています。熱帯雨林、具体的には南太平洋にソロモン諸島という所があり、そこで熱帯雨林と人との関係、コミュニティとの関係みたいな事を調べているのですが、熱帯雨林というと原生林とか手つかずの自然というイメージが日本人にはあると思いますが、実は熱帯雨林は調べてみると全然そんなことなく、人との関わりがある所なのです。もちろん日本の森林との関わり方は違いますけれども、やっぱり様々な人との関わりがあって、原生自然でも何でもない場所が多いんです。その木を材としての利用もありますし、薬草としての利用もありますし、結構植えたりしているんです。日本の造林感とは少し違いますが、木を植えていて、最近熱帯雨林の研究者の中では熱帯里山という言い方をする人も増えていきます。日本里山とは違いますが、人間と森との相互関係みたいなものは、日本だけの特徴ではないという事で、世界的にそういうものが見直されている状態ではないかなと

思います。

交付金の制約で、保全なのか資源利用なのか空間利用なのか、活動されているみなさんには3つに分けて補助金を出す形になっていますが、保全と利用はきれいに分けられるものでもないですし、資源利用と空間利用も分けられるものではなくて、もっと言えば保全や利用といった言葉に当てはまらない様な活動もあると思います。資源利用か保全か、その両方が組み合わさったような様々な森への関わり方があることが、多分本当の姿だろうと思います。割と資源利用を中心とした活動、でも他も組み合わせられている、ここはどちらかという環境教育を中心とした、というような関わり方など、その地域ごとに森も色々あり、人がどんなことをしているのか、どう住んでいるか、それによって何を中心に置くべきかわ変わってくるかと思っています。

今日の発表はそれが良く見え、本当に多様な活動をされているなと思いました。

森だけでなく、自然がどうあるべきなのか、人々が活動や生活をしている中で、これが正しいやり方というのではないと思います。どういう森が良いのか、あるいはどういう森との関わり方が良いのかというのは、実はそんなにはっきりしていないので、ダメということはあっても、良いというのは、幅広い活動の中で関わっている人が話し合いながら決めていく。森づくりというのはそういうことを考えるプロセスなのかな、という感じがします。

交付金は、林野庁がNPOなどにお金を出すことはあまらなかったことで、画期的な事業ですね。ただ、慣れていなかったことで、活動されているみなさんが使いづらかったという事があったかもしれません。そのあたりはこれから協議会も調整していきたいと思いますので、どうか要望は積極的に出してください。全てに応えられるわけではありませんが、そういうことが協議会や林野庁、あるいは道庁の仕事だと思っています。活動されている方は、交付金だけでなく民間の助成も取っていると思います。色々組み合わせ全体として北海道の森が良い森になり、北海道の森と良い関係になるというのが一番大事なことです。お金をどう使うかはそのための手段です。色々な団体・研究会と交流しながら良い森づくりが出来れば良いなと思います。どうもありがとうございました。